

大通 和座 通信

YAMATOZA

日々新面目

其の二十五

安東伸元

新しい年の最初には少々不釣り合いな報告を致します。正月四日の深更を端緒に、続いて七日と救急車に乗ること二度、入院と転院を繰り返して妻が緊急手術を受けました。病名は腰椎椎間板ヘルニアで、十日に受けた手術は椎間板ヘルニアの切除と髄核摘出手術でした。手術は無事に終了し傷も癒えました。今回は車椅子で移動して歩行器と杖を使ったりハビリ治療が始まっています。最初は医学的にも心理学的にも機能回復は遅々として進展しませんでした。激痛の記憶や、急に自分が陥った現状と将来に対する不安や心配が作用して、精神的治療も必要でした。しかし最近では、右足の関節筋力の回復兆候が明らかに自覚されるようになり、元氣と明るさを取り戻しました。この訓練治療入院がこれから一ヶ月続きます。 昨年暮れのある日、

疲れを訴えた後「私はもう、がんばれない」と言ったことがありました。この言葉をうかつにも私は聞き流していました。年末年始の行事を例年通り片づけていて、突発的に右足の激痛と歩行不能が起こりました。積年辛抱して耐えてきた何かが爆発したような急変事でした。私と妻の出発点は、短期大学生と教員という関係です。いまだに彼女は私を先生と呼びます。ですから何かにつけて、私の物言いが心理的に説教が訓辞のように聞こえていたようです。今になって初めて妻は、「親子二人が普通に暮らしているような会話がほしい」と言いました。また、出産の時に女は声を上げてはいけないうと母から教えられていたので、そのように我慢して産院の先生に感心されたとも明かしました。そういえば出産後の顔が、毛細血管の切れたせいでしようか、異常に赤かったのを思い出します。確かに妻は、我慢強い女性です。 十二日の朝日新聞「天声人語」にシャンソン歌手のジュリエット・グレコの事を書いた一文があり、思わず目が止まりました。《歌手でも役者でも、流れの速い芸能界で長く一線に留まるには二つの道がある。軽やかに時流に乗るか、がんに自流を貫くか。シャンソンの名手には後者が少なくない。7日に80歳になったジュリエット・グレコが典型だ。……と

んがって、反骨を貫くのは、人生の損得勘定でいえば大損かもしれない。これを不器用と笑つか、潔しとするかは人それぞれである。80歳を迎えた水曜日の夜、彼女は仏テレビの生番組に出た後、祝宴に臨んだ。参加者は家族ら8人だけだった》 四〇年前、企業人として第一線で輝いていた親友の一人が、慨嘆して私にこう言ったことがあります。「お前は世間の枠から外れて、損なことばかりしているではないか」、またある能楽研究者からは「もつと気楽に狂言を楽しんでは……」と助言をうけたこともありました。暴風雨の中で、やっと張り終えたテントが一陣の強風に吹き飛ばされたり、何とか建てた掘つ建て小屋が土台から崩れたりした大和座狂言事務所数十年の歴史は、極めて不細工で効率の悪い生き方の典型であったと言わねばなりません。その生き方に女兒を一人小脇に抱えて付き合い、失意を覚える出来事に耐え、不条理な扱いにも我慢をし、その上でひたすら行く先良かれと辛抱を続けて、ついに限界を超えた結果の突発異変だったのであるとうというものが、私の分析です。そして実は、この風雪を経て明らかに大和座の基盤が整備されました。その事を昨年末最終号の通信に「この一年幾つかの新面目も得て、大和座狂言事務所は無事生き残りました」と書きました。基盤作りの最重要課題は、人間の参集です。大勢の人たちと真正面から向き合っ

て応対し、裏を支えた彼女の存在があったればこそその整備進展です。私を筆頭に同人は、一様にその事を再認識しました。深く思い知りました。さて、女主人の居なくなつた家には70歳の父親と、8歳の女児が残されたわけですが、病人と同様に、その事を皆さんが気遣つて下さいます。本当にありがたいことと感謝しています。弁当持参で電車通学する小学二年の娘にとつて、隣家の存在がなければ登校は不可能です。毎朝7時に隣家のY夫人が弁当を届けて下さり、同じ小学校5年生の長女Mちゃんが娘の手を引いて駅へ急ぐ。休日であるのに催して私が不在の時は、一家をあげて娘の面倒を見て下さる。その上、毎週病院への定期便を努めて、心細さを抱えている病人を慰撫し励まして下さる。という生活が一ヶ月続いていきます。この一ヶ月、実に多くの方たちのお見舞いとお手助けを頂き、日々の生活は勿論のこと、予定されていた十余りの公演も支障なく済みますことができました。ご好意とご厚情のありがたさを身にしみて感じました。この気持ちは八歳の娘にも染み込んでいます。突然の変事を目の前にした大和座の若い人たちは、無事を得るために平常からの良好な人間関係がどれほど大切かを理解した事でしょう。もしそのような教訓が働いていれば、せめてもの事と思います。

従兄弟の元ジャーナ

リストから電話があつて、前号で紹介した尾野順一氏について、どのようなお方かと問い合わせがありました。高齢にもかかわらず論旨の鋭さとの確さが印象に残つた故の電話でした。従兄弟もそろそろ喜寿に近い高齢者です。われわれ二人の会話は、このような毅然とした精神をお持ちの大人がおいでと知る事は、後続の人間にとつて大いなる安心と励みをもたらせる。今の世の中、いわゆる「功成り名を遂げた」と自認する人物が、所々の要職にしがみついて老醜と老害をふりまいているが、何処を探しても尾野大老人のような人物が見つからない。と言う認識で一致しました。この大老人が昨年暮、肺炎が因で他界されたことをお知らせ致します。何を措いてもお別れに馳せ参じるべきところ、丁度私と娘がノロ・ウィールスにやられて起き上がれず、お礼とお別れを申しあげることが出来ませんでした。蠅螂の斧に等しい所業を演じているわれわれを、嗤いもせずたしなめもせず、ひたすら鼓舞して下さつた力強い大先達でありました。尾野老人は妻の実姉の義父になります。十九歳で母を失い、孤独になつた妻は、尾野順一ご夫妻を父母のよう慕つて接しておりました。関西の狂言界にあつて研究者として誰知らぬ者もない関西大学文学部教授、関屋俊彦先生とのご縁が実つて、今日の催しになりました。私

共はこのご縁を喜びます。本日を初回に作ります六回の催しに、お心をお寄せ下さつてのご来駕をお待ち申します。



安東 伸元(あんどつ のぶもと)
一九三五年大阪生まれ。一九六四年能楽協会入会、狂言方能楽師になる。茂山忠三郎家同門。
一九八一年より教育機関へ出講。現在、羽衣国際大学名誉教授、大阪芸術大学・大阪府立東住吉高等学校・NHK大阪文化センターの非常勤講師。二年、重要無形文化財(能楽)保持者総合認定を受け、「日本能楽会」会員。「大和座狂言事務所」を主宰。

鷺畔翁本《寢代》復曲

関屋俊彦

関西大学総合図書館に鷺畔翁（さぎばん おう）の狂言台本十冊（一冊二十曲、計二百曲の書写）が残っている。奥書には「大正七戌午年 廿一世七十七歳 鷺仁右衛門 畔翁」と署名し、「鷺流家元」の朱印が押されている。大正七（一九一八）年、鷺流家元廿一世仁右衛門畔翁が書き写したというのである。しかし、どの能楽諸家の系譜を調べてみても「鷺流家元」とは記載されていない。すなわち畔翁は能楽の世界からは現在でも家元として認められていないのである。法政大学能楽研究所には、その二年前にも同じ体裁で書かれたものが残っている。細かい字に七十を越えたまさに高齢の老人が流儀の危機に必死の思いで書き写していた姿が思い浮かべられる。関大本は、まさに畔翁最晩年の台本である。貴重書でもなんでもないので余計痛ましく感じられる。なんとかしたいとの思いが強まった。機会あることにあちらこちらでこの台本のことを書いてみたり、講演でも紹介してみたりした。しかし、所在ないままに時は移るばかりであった。

二〇〇五年、『狂言画写』（和泉書院）

の序文を中野榎子氏の夫君真作氏に依頼され、それがきっかけで榎子氏の共著者である安東伸元氏にお近づきの機会を得た。もちろん、それまでも氏の舞台を拝見し、楽屋などでお話したことはあるが、挨拶程度にすぎないものであった。そこで、早速私の授業にゲストスピーカーとしてお招きし、その際、図書館をご案内し、畔翁本を見ていただき、私の思いを伝えたのであった。安東氏の反応は早かった。一緒に復曲しましょうということになった。次に自分すべきことは、関大本の全曲名をお知らせすることであった。多分、大蔵流と同じ曲を選ばれるであろうと推測していた。その中から数曲が候補にあがったのだが、そのどれもが大蔵流現行曲とは異なるものであった。氏の意気込み、新しいものへチャレンジしようとする姿勢が感じ取れた。様々な条件を考えて今回の《寢代》が決まったのである。

ここで鷺畔翁その人についてと本日曲の紹介をしなくてはなるまい。

狂言の流派には、大蔵流と和泉流がある。徳川家康に見出され、観世流座付となった鷺仁右衛門宗玄（宗家十世と伝える）の活躍で有名なもうひとつの狂言流派は、近代に入って滅びてしまい、わずかに山口市に残るものが鷺流と称しているが、民俗芸能として扱われているにすぎない。

鷺畔翁は、天保十三（一八四二）年の生まれ。仁右衛門家十六世定賢の次男賢次郎賢通の養子（届けは実子）。文久三（一八六三）年、家督相続。明治維新に遭遇し、一時農業をしていたとも伝える。扶持を離れた能楽師・狂言師はたちまち生活に困ったのである。吾妻狂言とも今様狂言ともいわれる三味線を使った大衆芸能に走った者が現れたのもこのころのことである。畔翁は、歌舞伎界に入り竹柴蝶三を名乗り座付作者となった。狂言の芸を教えたのである。それを教わった面々は今から考えると錚々たるメンバーである。守田勘弥・岡村紫紅・六世尾上菊五郎・七世坂東三津五郎等々。守田勘弥は今をときめく坂東玉三郎の系譜で、京劇の名優メイ・ランファンとも交友があった。

鷺流滅亡の原因を小林貴氏は『狂言史研究』（わんや書店）で家元権之丞の奇矯な性格、流儀の狭い体質を挙げられる。やはり当時能楽より位の低かった歌舞伎に手を出したことが大きな原因であったのである。私は体質的には鷺流と歌舞伎の接点は阿国歌舞伎にまで遡ると考えているのだが、それは今ここでは触れない。それにしても畔翁の晩年は悲惨であった。期待していた養子も早世し、『能楽』には身の回りを世話する女弟子との様子をかるうじて紹介するにすぎない。七十三歳の時の「生きてい

るばかりぞ冬のひきがえる」の句は涙を誘う。大正十一（一九二二）年八十一歳没だが、七十九歳没説もあり定かではない。

さて、この《寢代》であるが、大蔵流では通称「虎明本」（『古本能狂言集』等に所収）と呼ばれる徳川三代につかえた大蔵虎明（一五九七～一六六二）が書写した台本の「萬集類」と呼ばれるものの中に「寢替」として記載されている。鷺流では「保教（やすのり）本」といわれる鷺別家伝右衛門家三世の保教（一六七五～一七二四）が書写したものが、やはり「寢替」として天理図書館に残っている。和泉流は番外曲で鷺流のものを真似たらしい。「虎明本」「保教本」とも本日の子ラシの前段落にあるように「檀家の後家に懸想して夜這いに及ぶ」けしからぬ坊主の話がメインとなっている。ありがたいお経の長い唱えごとがあるのだが、それすら口説きの文句となっている。「萬集類」は中世の面影を残す雑多な曲が集められたものであるが、まだ狂言に流儀といわれるほどのものが確立されていない時代に破戒僧を揶揄したものである。式楽された時代にそれほど演じられたとも思えない。しかるに一九八三年に茂山あきらの出演で演じられたことがあるようである。残念ながら私は見てはいないが、相当際どい演出で、客は驚かされたであろうとは想像がつく。

畔翁の台本は、それら古台本と比べると肩すかしを食う感じである。期待された向きには申し訳ないが、換骨奪胎というか品よく仕上がっている。したがって意味の通りにくいところが多々ある。女の素性が後家であることがあいまいである、古台本と違って女は最初から迷惑がっている、太郎冠者は最初狐が狸が化かすのではないかと思っている等々である。ほぼ似た書き方である山口市に伝わる台本等との先後関係は未解明であるが、なぜ品よい作品にしようとしたかは能楽界復帰を望んでいた畔翁の思いを考慮に入れてみると面白いのであるまいか。

後半は、本日演じられる《柿山伏》（この曲については田口和夫氏が『狂言論考』で『今昔物語集』に天狗が仏に化けて柿ノ木に現れる説話を早くから紹介している）や《盆山》と同工である。なあんだと思われるかも知れない。私も最初はそうだった。しかし、ここに来てキーワードは「カワウソ」であることを発見した。カワウソは特に二ホンカワウソは特別記念物であって、インターネット情報によると一九七九年以来目撃例がなく絶滅したと考えられるものである。幼い頃、身近にいたような気がするカワウソがなんと絶滅種なのである。僧侶が「カワウソ」と鳴いても客には笑えなくなつた状況になつてしまつたのである。

「カワウソ」ともいい川に住む恐ろしいものとも伝える。また、カワウソが人をだました説話も数多く残っている。まさに太郎冠者が言うよう狐・狸と同列なのである。珍しくなつてしまつたカワウソの復権をこの畔翁本で訴えたいのである。

私は、人間国宝となられた野村萬氏にも習つたことがある。それも二十年以上前のことである。当時から体が硬かつたので「まるでペンギンの貯金箱みたいだ」と言われたこともある（ちなみにペンネームは「筆吟」です）。あくまで素人にすぎないことはお断りしたい。今回はからずも舞台に立たせてもらえる幸運は安東氏の御高配によるものであり、当然、研究との一致を今後課題としていきたいのである。

関屋俊彦（せきやとしひこ）

広島生まれ。関西大学文学部教授。文学博士。

論文集『狂言史の基礎的研究』（和泉書院）、共著『天理本狂言六義』（三弥井書店）、編著『勸進能并狂言尽番組』、『能面図』（共に関西大学図書館影印叢書）。最近の成果「対談 生田秀・耕一を語る小鼓の話」（『関西大学図書館フォーラム』第十号）、「狂言《通巴》をめぐって」（『説話論集』第十五集・清文堂）。能楽学会設立に寄与。藝能史研究会・日本笑い学会にも所属。

狂言を読む「寝代り」

もろきゆう

都はずれ白川のほとりにある柴の庵に年寄った尼が袋をかずき、行商に訪れた。尼は小袖・御衣・頭巾の布切れなどを袋に入れて売り歩き、また「いろいろなお屋敷に出入りしているので針・おしろい・化粧道具・薬なども取り扱い、その上高貴な身分の上臈や宮仕えの女房などの恋の橋渡しもいたします。」ということであった。そこで庵主の法師はこの尼に「心優しい人ひと目逢わせてください」と妻となるべき人をお願いした。尼は法師の独り住まいに同情し「良い女性に逢わせてさしあげましょう」と急いで出て行った。そして四・五日後にやってきて、「あちこち探し回り、これはよい人かと見れば容貌が悪く、あるいは年寄りだったり、まぶたがただれていたり、すこし口がゆがんでいたりと適当な方はいらっしゃいません」というので、「容貌も年齢も問いません」と言うのと「山崎のほとりに住まいする尼君が、みめかたのよい人でいらっしゃいます。この人にお願いしましょう」という。「それはうれしい」と年を尋ねると法師より十も年下だ。「それでは話をつけて参りましょう」と御用の尼は帰り、五六十日も過ぎたころ、いよいよ

よ女性を連れてくる口となった。法師は隔々まで掃除を済ませ準備万端待ち受けていた。そこへ御用の尼がやってきて、前祝いの盃ごとと云って、さんざんに酒盃を重ねた後、「間もなく連れて参ります。あまり明々と灯火などつけずに部屋を暗くしてお待ちください」と言う。いよいよ待望の女性が法師の寝屋に入ってきて、暗い中で祝言の盃ごとをかわし、一夜を過ごした。明るる朝、目が覚めて傍らの扉を少し開けてみれば、七十ばかりの年老いた尼が寝ている。なんとよくよく見れば御用の尼であった。

これは室町時代の物語、『おようの尼』という話で、破戒僧の失敗談だが、中世のわわしい女のイメージがする物語として、狂言にも通ずる話とされている。(『御伽草子』西沢正二氏、新典社)法師は若い女性を紹介してもらったつもりだったが、一晩過ごして顔を見てみると御用の尼自身に寝代わっていたのだ。法師は御用の尼の嘘にまんまとだまされたのだ。

さらに寝代わりの類話として思い浮かぶのは、「御伽草子」に収録されている『猿源氏草紙』である。この物語の中に鯛売りの猿源氏がさまざま恋の話を語る場面があり、そこで「一目見ての恋」の逸話として「文覚上人」の発心譚を語っている。もちろん文覚上人の逸話は『源平盛衰記』に詳しく載っているが、ここでは室町末期の

特徴をよく表わしている『猿源氏草紙』に載せている文覚発心譚をあげておく。

ある時、遠藤武者盛遠は、橋供養の警備の奉行をしていた。供養を聴聞している中に苦屋形をした船が一艘、岸へ漕ぎ寄せてきた。そこへ突然浦風が吹き、下すだれを持ち上げ、その隙間から美しい女性の顔がちらりと見え、盛遠はたちまち恋に落ちた。女性の身元を尋ねると、天女と呼ばれる渡辺左衛門の妻であることがわかった。盛遠はその母の尼御前を尋ね、天女に逢わせてくれなければ自害し果てると脅し、尼御前が風邪を引いて苦しんでいると偽って天女を呼び寄せさせた。天女と二人きりになった盛遠は天女に思いを打ち明ける。困り果てた天女は「夫がいるのになあなたになびけば、貞女の道にそむくことになります。夫を討ち果たしてくれば、あなたと夫婦になりましょう。」と答える。盛遠は喜び「それならば、どのようにして討ち果たしましょう。」と問うと、天女は「私が酒を吞ませますので、酔い臥したところを討ってください。」という。帰宅した天女は尼御前の身を案じる夫と盃を酌み交わし、左衛門は酔いつぶれてしまった。天女は静かに起き上がり、夫の小袖を着て、夫の姿をまねて横たわった。夜も更けて、盛遠が寝所にやってきて、左衛門とおぼしき人物の首を討ち取って帰った。翌朝、目を覚まし

た左衛門はむなしくなった天女の死骸を抱いて泣き伏した。天女が亡くなったとのうわさを聞いた盛遠は首を見て天女にだまされたことを知り、天女の首をもって左衛門のもとへ行き、事情を話し「私の首を討ってください」と首を差しのべた。しかし左衛門は「盛遠を討つたとしても天女は戻らない」と自らの元結を切り、天女の菩提を弔うと告げた。盛遠もそれを見て、その場で元結を切つて天女の菩提を弔うため出家をした。左衛門はもんしゃうと名乗り、盛遠は文覚と名乗った。室町の人々が語り伝えた「文覚発心譚」は以上の通りである。

盛遠は結局自分の恋を成就させるため尼御前に嘘をつかせ、天女をおびき寄せ、まんまと思いを遂げられると思った。しかし天女は盛遠をだまし、夫の寝所で代りに寝て自分の首を討ち取らせたのである。この物語を聞いた人々は尼御前に嘘をつかせて天女を呼び寄せた盛遠の行為を咎めるわけではなかった。また盛遠をだまして自分が身代わりになった天女の行為も咎めはしなかった。この時代、嘘をつくことは現代人が考えるほど、道徳的に悪いことではなかった。さて、私たちの社会はメディアの嘘によってだまされることが往々にしてある。映画監督森達也がよく例に挙げているが、オウム真理教の事件を取材する時、大手メディアはこぞつてオウムは凶悪犯罪集団である

という視点から映像を作った。森達也はそんな大手メディアの取材姿勢に胡散臭さを感じ、オウム真理教の内部に潜入してドキュメンタリー映画「A」を制作した。その映画を見ると、オウム真理教の信者たちはけつして凶悪な殺人鬼集団には見えない。一人一人は普通の真面目な青年だったり、むしろ現代社会の俗悪さに染まっていけない人たちであることがよくわかる。その話をもとに森達也はメディアは嘘をつくといったのである。確かに世界をみてもルワンダではラジオというメディアの流す情報によつて何十万人という人々が虐殺された。また松本サリン事件の時はメディアが被害者の夫を疑わしいとしたため、被害者の夫は犯人扱いされ、多大な人権侵害を受けたということもある。現在テレビ・ラジオ・インターネットなど多種多様のメディアの情報とともに私たちの生活は成り立っている。そんな情報化社会で必要なりテラシーはそんなメディアの嘘にだまされないといいことである。私たちがメディアの嘘に振り回されずに生きていくには、メディアの流す情報をどのよう受け止めるかが大切である。嘘を鵜呑みにしないためには、まずメディアは嘘をつくということを知ることだ。個々人がメディアを介して情報を発信する場合は個人の人格や倫理観による。しかし、公共性を持つテレビ局や新聞社は公

共性という使命を帯びて情報を発信しているはずだが、残念ながら精査して情報を流しているわけではない。だからテレビ・ラジオ・新聞・雑誌などの流す情報が必ずしも真実であるとは限らないのだ。もちろん嘘の情報を流してることが発覚した場合、徹底した事実の確認と、責任の追求は必要である。しかし、情報を受け取る側はその嘘にまんまとだまされたからといって、発信側を責めるばかりではいけない。情報の受け手自身が、メディアの流す嘘をうまく受け止める姿勢を養わなければならぬ。嘘をつかれてもその嘘をいち早く見抜き、騙されないように工夫することだ。嘘をウソと受け止めることができれば、いちいち腹を立てることもない。そんなものだという理解は怒りの感情を引き起こさない。むしろその嘘を楽しむ心の余裕が必要なのではないか。情報の嘘を楽しむ余裕があると「ダイエツトによく利く」とテレビで放映されたからといって、いくつもの納豆を買い込まなくて済むだろう。

ところで、「嘘」という言葉は室町時代ごろからよく使われるようになった言葉だ。本来「嘘」は「うそふく」と読み、『説文』に「嘘は吹く也」とあるように「ゆつくり息を吐き出す」という意味であった。これが室町時代末期ごろの日葡辞書（日本ポルトガル辞書）には「いつわりの言葉」とい

う訳がついている。ほかに『閑吟集』(十六世紀初頭成立)に「人は嘘にて暮らす世に、何ぞよ燕子が実相を談じ顔なる(だれもが嘘をついて暮らす世の中であるのに、なんで燕だけがいかにも実相を語りたそうな表情をしているのか)」とあり、時代の変遷によって「ゆっくり息を吐き出す」という意味から「いつわり」という意味に変わっていたことが窺われる。また同じく『閑吟集』には「人の姿は花靴優し差して負うたりや うその皮靴(いとしい人の姿は靴に花をさしたりして、まことに風流ですこと、けれども逢つてみると負っているのは嘘ばかりの獺の皮靴)」というように「嘘」と「獺」とを掛詞として使われるようになった。

さて、狂言「寝代り」ではあるじの女性の枕元に夜な夜な、出家が現れ、迫つてくるといふのだ。だから女主人は太郎冠者を呼び出し、自分と寝代わるよう命ずる。ここに登場する出家も「およふの尼」に登場する法師と同様、破戒僧であるとも言える。それはともかく法師はつきり女性だと思つて顔を見ると太郎冠者だったので、驚いて物陰に隠れる。そこで太郎は法師をさんざんからかつて追い払うのだが、その際も嘘でからかう。太郎冠者が、あれは烏だ、狐だと言つてからかつているうちに、互いに遊び心が生じてきたのではないだろうか。

そして嘘を楽しむ心が生じてきた。だから「あれは獺だ。獺ならば鳴け」といわれて出家は最後に「かわうそ」と「かは嘘(これはうそ)」と洒落で応じ、笑い飛ばして逃げるのである。了



山田 師久(やまだ もろひさ)

大阪生まれ。本名・山田茂。一九八六年より安東伸元に師事。中世文学及び芸能を専攻研究。大和座狂言事務所の学術ブレーン。月例「輪讀会」の座長を務める。学問的指導の他、若いスタッフたちには人生問題の良き相談役として長兄的存在。高等学校国語科教諭。

ティッシュ配りに感じたこと
「腹式呼吸と間合い」考

森五六九(もりごろく)

街頭の広告入りポケットティッシュ配り。自然に思わず受け取らせてしまう者とそうでない者の差は歴然としている。相手のどの位置にティッシュを持っていくか、どの位置に立つかがとても重要らしい。そして何よりもタイミング。瞬時に相手の呼吸に合わせる人がきつと上手いティッシュ配りだ。つまり「間合い」。相手の呼吸を読み、スツとティッシュを渡す技は剣道の「間合い」にも似ている。ティッシュ配りの中には通行の邪魔にならぬようダンスを踊るみたいにクルクル回りながら流れるような動きの中で「間合い」を図り配っている者もいる。何気なくやっているのかも知れないがあれも一つの立派な芸である。私などついティッシュ配りに見とれて難波の高島屋の前で佇むほどだ。どんな世界も極めた人の動きは美しい。そう言えば、うちの先生(安東)もある喫茶店のマスターがコーヒースタンドを立てる様の美しさを誉めておられた。

このところ私は地方を一人で廻ることが多く、特に忙しい時は月の半分近くがビジネスホテル暮らし。お客も主催者も落語を聞くのは始めてという方が多く、初体験す

る者にとつては私の落語がそのまま落語の印象に繋がるという憂いを抱えながらのいわゆる営業といわれる実演である。たいていはある催しの中のひとつとして私の落語の時間を頂く。私をよく売り込んでくれているイベントプロデューサーが主催者側にプレゼンに伺った際にこんなことを言われたらしい。「もう落語はこりこりです。」

以前に誰か別に落語家を呼んだらしいのだ。あまり評判がよくなかったのだと言う。私もきつとどこかで同じことを言わせているに違いない。だから初体験者に向けての落語は特に怖い。責任重大なのである。ところで、前日の現地入りで初めての土地に行くに必ず行うことがある。それは御当地の散策。できるだけ一人で食事に出掛ける。主催者に誘われた場合は別にして、一人の時はおそらく地元の人しか行かない常連ばかりでカウンターが中心の居酒屋を選ぶ。このへんの嗅覚は自分で言うのもなんだがたいしたものである。このような店で他所者はやはり目立つらしく常連とおぼしき方が必ず声を掛けてくる。「兄ちゃん、大阪か？」料理を注文する際のちよつとしたやり取りですで見破られている。但し職業はあくまで取材のための訪問だからである。私が落語家だと知るやそれに関する質問責めに合い取材どころでない場合もあるから

だ。何気ないやり取りから情報を仕入れて次の日のマクラ（本題に入るまでの世間話）に折り込む。仕入れは何も御当地ネタに限ったことではない。その土地の語気の強さ、話のテンポ、県民性・私の少ない経験で言うなら山辺の町と海辺の町は明らかに氣質が違つし、海辺でも日本海側と太平洋側でも違いが見られる。地元の空気を感じて店を後にする。千社札を張り付けて帰るのも忘れない。私が以前客演させて頂いた「ふるさときやらばん」では本番前に必ずその地域の信号機の数の報告が制作スタッフからなされた。これなどもその土地のテナポを知る大きな情報である。少しでもその土地の波長や空気を感じる。私は強度の恐怖症でこれをしてしないと落ち着かない。本番前でもギリギリまで着物に着替えることなくロビーに行つてお客の話を盗み聞きしている事が多い。顔の売れていない事がこついつい時には逆に幸いする。ポスターの写真も実物とはずいぶん印象が違つらしい。第一声はどんな調子でどんなテンポで入るか、どんな咄をしようか思案。ここでマクラの話題を頂戴することもある。「芸人は上手も下手もなかりけり、行く先々の水に合わねば」。

ところで「笑つ」という現象は息を大きく吐くという行為である。笑つことで呼吸がはつきりするわけだからお客との呼吸が

合わせやすくなる。前にも申し上げたが、演者とお客の互いの吸つたり吐いたりする呼吸が一致した状態を「イキが合う」と言う。「あれ？おかしいな？」という演者の一言でお客は緊張をして息を詰める。演者も一瞬息を詰める。「なんだ。そんなことか」と思わせる次の言葉を詰めた息を吐きながら言い、お客は吐きながら笑つ。これが笑いを起す原理のひとつ。「笑いは緊張の緩和である」とおつしやつたのは故桂枝雀師匠。お客との息が合うかどうかが高座の出来を左右する。高座は上がったからのおよそ一分間が勝負。高座に上がる。お客と向き合う。喋り出す。その時お客が自分を受け入れてくれているかどうかは肌で感じる。お客が同じく呼吸してくれているかどうか。波長と言つた方がわかりやすいかも知れない。それを同じくしてからお客をのせていく。高座もお客との「間合い」が肝心だ。最初のツカミは特に苦心する。

舞台人は芸種に関わらず「腹式呼吸」を求められる。これはスポーツの世界でも同じだろつ。剣道の間合いは腹式でぐつと息を詰め、相手との呼吸を図つて勝負に挑む。つまり「腹式」の効用は音量という問題もあるがむしろ「呼吸」を図るがため合わせるがための理由が大きいと思う。そんな息の深い人の方がこの場合絶対有利だ。息の深い人は浅い人に合わせられるかも知

れないがその逆はあり得ない。また、腹で呼吸する息の深い人は「腹が座る」という言葉が示すようにそういう人は落ち着いていて冷静なので相手の呼吸も読みやすい。反対に肩で息をしがちな人は「腹が座っていない」ので息も浅く余裕がなく落ち着きがないのでどうしても自分本意になりやすい。自分本意ということは相手の息に合わせられないのと同じだ。ヒステリックになりがちな人、直に切れやすい人を見るとどうも息が浅い人が多いのも頷ける。(この辺は斉藤孝著「身体感覚を取り戻す」NHKブックスに詳しい)こう見ていくと「腹式呼吸」というキーワードは「芸は人なり」という事にも繋がってくる。気持ちを落ち着かせるがため深呼吸を行う道理だ。

お客や共演者との息を合わせることで初めて成り立つ舞台芸術。お客から見て「呼吸を合わせて気持ちいい」のがいい落語であり、いいポケットティッシュ配りである。相手の気を読んで息を合わせる。なかなかムツカシイことだし私はまだまだまなならない。思えば今は亡き我が師、桂春蝶は弟子である私に常々こう言った。「わしの気ひとつ読めん奴に二百人三百人のお客を前に落語ができようはずがない」そう言っただけで師匠は私をわざわざ住み込みしてくれた。(一番大変なのは奥さんの方だと思っが)師匠が心地いいかどうか、今何を考えてい

るか弟子にとつてとても重要な関心事だ。今は茶を出すのがいいかそれとも水かそれを出すタイミングは？多々ある報告をするタイミングや順番や言い様は？稽古をお願するタイミングは？四六時中顔色を見ている。用事というものはただ一生懸命にこなせばいいというものではない。師匠との関係は弟子にとつて緊張の連続。環境そのものが「間合い」のお稽古。そして又、芸の修行は師匠との関係やネタを繰る稽古のみならず日常生活の中にも多分にあつた。ティッシュ配りを見ていて私はそう感じた。

(了)



森五六九(もりごらく)

大阪生まれ。落語名・桂蝶六。大蔵流狂言方安東伸元に師事。現在、放送芸術学院、大阪スクールオブミュージック専門学校、大阪シナリオ学校の各非常勤講師の他AECアーチストカレッジの落語教室及び大阪府立桃谷高校特別非常勤講師など、「高座」ならぬ「講座」も勤める。現代社会にあつて、好ましい芸能人の在り方を模索中。

「学び」の形はどへゆく

井上放雲

昨年10月、「美しい国」を目指す首相が教育再生会議をスタートさせた。会議の様子は一般公開されず、ニュースや新聞報道によると、どうも議論の内容や委員の考え方はバラバラの様で、何をやりたい会議なのかが見えてこないとのこと。私には詳しいことはわからないが、要はそもそも教育の現場を画一的なシステムに乗せようとしているから、收拾がつかないのではないかと思う。「ゆとり」か「詰め込み」か、の論点ひとつ取り上げてみても、「ゆとり」方式がフィットする子供もいるだろうし、「詰め込み」にも、無理矢理いやいや詰め込まれるのと、興味を持って自ら詰め込んでいくのでは全く意味が違ってくる。本来なら教育現場で、教師が生徒一人一人の特性を確かめ、最も効果的な方法を処方し施してゆく、診察と治療のような形が欲しい。しかしそんなことは現実には難しいし、それこそ教師の側に「ゆとり」がないのが現状だ。

元々、教育のスタイルには大雑把に言つて2通りのスタイルがある。一つは指導者が「全てを教える」スタイルだ。かつて、ヴァイオリンの指導者として、世界的な人

材を数多く育成し高い評価を得ているザハー・ブロンズの公開レッスンを見学した事がある。まず生徒の演奏を聴いた後、ブロン先生は弓使いやら指使い、音楽の発想からオーケストラとの合わせ方等々、気になるところを自ら楽器を弾いてお手本を示し、改善を促してゆく。時には作曲家の生い立ちや歴史的なエピソードについてユーモアを交えて語り、作品の理解を深め、微に入り細に入り徹底的に生徒に仕込んでゆくなかで、結果として生徒が明らかに音楽的な演奏を獲得していく様子が見てとれ、それは見事な教育現場だと私は感じた。

アメリカの指揮者・作曲家として知られるレナード・バーンスタインも「全てを教える」タイプの音楽家だ。彼は直接のレッスンのみならず、テレビ番組を通じて子供に対してクラシック音楽の啓蒙を試みた。彼の脚本・解説・指揮によるこの番組『ヤング・ピープルズ・コンサート』は、伝統のないアメリカのクラシック音楽文化において、その根底を支える人材を数多く育てた事と思う。また多くの書物を書き残した。またハーバード大学での講義は今DVDで見ることが出来る。私自身、直接彼に会う機会を得られなかったけれど、多大な思想的影響を受けていると思っている。

一見合理的な「全てを教える」スタイルは、何となく欧米の教育スタイルというイ

メージがある。しかし日本の古典も、口伝によつて師匠の生き写しをはかる方法や、徹頭徹尾「型」の習得をはかるうとするやり方は、（それが健全かつ平等に機能したとすれば）、本来このスタイルに属すると言えよう。

しかしながら時折私は、正直「教えすぎは良くないのではないか？」という懸念を抱くことがある。合理的に学んでしまうこのスタイルは、生徒自らが考え実践し失敗を経て学んでいく過程をはしょってしまい、自身の力で大事なことを獲得する能力が育たない事もあるのではないか、と思つてしまふのだ。

それに対して、もう一つのスタイルが「教えない」という方法論だ。薬師寺の金堂や西塔の復元で陣頭指揮をとつた宮大工の棟梁・西岡常一氏は、弟子に対して細かい事は一切教えなかったという。例えばカンナの削り方などは、一度見本を示して「これがカンナ屑や」と言つて、立ち去つてしまふそうだ。弟子たちは残つたカンナ屑を見て、同じような薄さになるよう、刃の研ぎ方やカンナのかけ方を日々研究するしかなかったらしい。わからないなりに自分で考え一心不乱に刃を研いでいると、手がそのコツをだんだんと憶えてくる。兄弟子たちも細かくは教えてくれない。師匠や先輩たちの仕事を見て盗みながら、身体で

仕事を習得していくという。これは時間がかかるやり方だが、自分で理解する、身体が憶える、という意味において、素晴らしい方法論だ。

欧米の歌劇場で今引つ張りだこの日本人指揮者・大野和士氏が、指揮の極意についてNHKの番組で興味深い見解を述べた。本来、100人からなるオーケストラでは指揮者はオーケストラに対して、どうぞご自由に、という訳にはいかない。タクト一本で全ての決定事項を指示し、ドライプしなくてはならない。ところが大野氏は、「指揮者が全てをあしるこつしると思つても、いい音は出ない。「私たちの目指すゴールはあそこです。行きますよ、よいドン！はい解散！」というのが理想。」と語っていた。指揮者が全てを牛耳っている様に見せながら、目指す最高の頂きへは、演奏者自らの意志と力で辿り着くのが理想としたのだ。

冒頭で触れた「詰め込み」と「ゆとり」は、まさしく2つの相反するスタイルにそれぞれ属している。単純にどちらが良いとか、どちらが悪いとは言えない。

どちらのスタイルにせよ、共通して不可欠な存在がある。それは理想を示すことのできる指導者の存在である。目指すべき理想が確かにあればこそ、そこへ向かつていく方法が見えてくる。

日和見的に言えば、この両者の融合こそが、教育再生の鍵となるはずだ。

結局私の中で辿り着いた結論は、戦後日本の音楽教育を支えた斎藤秀雄先生が折に触れ口にしていたという、この言葉に全てが集約されていた。

「まず型に入れ。そして型から出よ」

2007・2・14 井上放雲



井上放雲(いのうえ ほつりん)
兵庫県生まれ。

本名・井上康夫。相愛大学音楽学部卒業、ポランド留学、国立ワルシャワ・シヨパン音楽院修了。チェリストでもある。日本の舞台芸術理論を学ぶべく、安東伸元に師事。バルト三国・イラン公演に参加。室内楽グループ『アンサンブル「ベンジェ・ドブジェ」』の代表を務め、東西古典文化の間を日々驚嘆の喚声を発しながら往復している。大和座の若手にとっては最適の相談役。相愛大学と大阪芸術大学で非常勤演奏要員を勤める。

兆紀探求

「肉体化された生きた声」

小田兆紀

年末年始になりますと毎年長編時代劇を各局が放送します。いつもならそれ程真剣に見ることはないのですが、今年はふと思いつき立ちそれらができるだけじっくり見るとにしました。いくつか見た時代劇で少し気になることがありました。今年見た作品は「〜で御座るよ」や「かたじけない」という常套的な古い言葉を並べて時代劇です。どうぞご覧あれという作風のものではなく、最近では耳にしなくなった言葉が要素所に含まれていて、一昔前の娯楽時代劇などに比べると少しはまじに考察されたものだったのでしょうか。最近しきりにいわれている「美しい日本語を取り戻そう」という運動のせいもあるのでしょうかけれどもその言葉が、正確にはその言葉を扱っている若い俳優さん達のセリフを聞いていて違和感を覚えたのです。一言で言うならその聞きなれない日本語に限ってセリフが棒読みになっているというものでした。

私自身、なんとなく理解した程度でセリフを言うことややはりその部分を指摘されるのですが、今の俳優さんたちはそうだった指

摘を受けることがないのでしょうか。勧善懲悪の痛快な娯楽劇ではなく美しい日本語を聞かせようと意図する以上、セリフの審査を受けることは必要だと思いますし、役者自身が吐くセリフを理解するのは当然の事だと思えます。セリフが浮き上がってしまつという現象は、我々が各教育機関で「今まで古典を見たことも聞いたこともやつたこともない」生徒に上演させる為の稽古時に感じる言葉の理解不足に通じるものがあると思います。今までの人生の中で見たこともなければやったこともない事を実際誰が見聞きしても納得出来るレベルで表現しようとなると、その物事を知りそれに肉迫する必要があると思います。話題作りの為に顔立ちが良いだけの俳優でもない人間に大きな役を与えてみたものの、あまりに軽すぎる演技に大変不満を持つというのは今に始まったことではないと思えます。

ある日、安東先生の授業に同行させていただいた時のことですが、学生に投げかけた質問の中に「君達は日本語と言うものを扱ってきた上で困ったことはなかったか」との問いに多くの学生達は「自分の感情を表現するのに最も適切な言葉が直ぐに出てこない」という返答をしていました。折り返し良く私も声優を志す人を養成する機関に講義に行くという機会を得、その学生にも同じ質問を投げかけてみました。声優とい

う仕事は声だけで全ての想いを表現するものです。舞台等は肉体と言葉という二つの表現媒介つまり視覚と聴覚がありますが、声優は言葉、聴覚のみです。実際はそんなに簡単に割り切れるものではないのですが、簡単に説明するとそういうことになるはず。そんな「言葉」だけで勝負しようとする彼らからもやはり「日本語のたくさんある表現方法を使いこなせない」という答えが返ってきました。風景を想像させる言い方やこの人間は今こういう心情でいる等、聞いている人の想像力を言葉だけで助ける表現能力が必要です。雪の降り方一つを取り上げてみても日本語には「どのよう以降るか」という多様な表現方法がありますしそれら語録を知っているかいないかは言葉を扱う上で知らない者との表現の差となるでしょう。これは別に表現を志す若者に限った問題ではないと思いますが、日本人でありながら日本語が身近にないという現実ではないでしょうか。私自身も言葉を扱う以上このテーマとは常に向き合っているかなければならないと思っています。

話を先程の時代劇に戻しますが、高齢な役者さんから出される言葉は納得の出来るものでした。体に染み付いている、入り込んでいたという表現が最も適切でしょう。見聞きした事柄を自分の体の中で咀嚼し肉体化出来ているのだと思います。ただセリ

フを覚えて言うだけで表現者というのであれば誰でも表現者という事になってしまいます。自分の体に様々な表現方法があるということを確認させ入れておき、その言葉を誰が聞いてもそれを扱う人間が自分の体の中から出している、肉体化できた生きた言葉を扱っていると思ってもらえるレベルまでもっていくことができないと表現者とはいえないのではないのでしょうか。

日本語の美しさや力強さを表現する為にはまず美しいと思える基準を作ることです。たくさんある方法の中で一つは、美しい日本語を聞き続けるということではないでしょうか。幸い私には日本語の美しさを体現できる表現者であり指導者でもある安東先生がいてくださるのですが、私のように基準となるもの、指導してくれる人がいない場合はどうすればいいのか。私が知らないだけで他にもきつといらつしやるのでしょうか。けれども、なかなかお目にかかる機会がないと思います。普段から注意して探し、見聞きしたりする必要があるということです。そして、その判断基準を育成する為にはメディアなど自分とその対象の間に機械を挟むのではなく、実際に現場で聞く事が近道だと思つのですが如何でしょうか。



小田 兆紀 (おだ ちょうき)

一九七八年和歌山県新宮市生まれ。
 本名・小田政明。大阪芸術大学舞台芸術学科卒業。大学の講義で安東の薫陶を受け、卒業後「大和座狂言事務所」に所属し研修を重ねている。二三年のイラン海外公演に参加、この経験は演劇を目指す人間として自覚を定める開眼脱皮の貴重な経験となった。二三年以来、橋本市の「市民狂言を楽しむ会」講師をつとめている。

「変革」

金久蒼汲

大学を卒業して六年が経とうとしています。学生時代を共に学んだ仲間達は、劇団に入団したり、外資系アミューズメント会社と契約したり、映画の世界に飛び込んだり、ダンススタジオを経営したり、海外へ進出したり、自分達でユニットを組んだり、今でも様々な場所で何かを表現し続けています。卒業以来ほとんど連絡を取っていません。仲間も多いのですが、社会へ出て六年も経つと、みんな自分の表現に一通りの落ち着きを見せるのか、何かしらの息詰まりを感じるのか、最近になってまた連絡を取り合うようになりました。話す内容は専ら懐かしい学生時代のことや、お互いの現状報告などがほとんどなのですが、話が今抱えている問題や将来の展望の事になると「私達には、人格に裏打ちされた個性が足りない」という内容の悩みを打ち明ける仲間が結構いることに驚きました。

いつからか現代社会には「個性を尊重することが豊かな人間性を育む」というような風潮が蔓延しているように思います。他人とは違った独創的な思考や行動ばかりが重要視され、またそういう人間に成ることがその人間の人格を形成する、というよう

な意味でしょうか。数々の発明や芸術が独創的発想から生まれていることは事実ですが、私はこれには大きな落とし穴があるように思えて仕方がないので。私達は毎日社会の一員として生活をしています。社会にはルールやマナーがあつて、みんながそれに則つて行動することで一定の水準を保っているのです。またそうすることで他人を理解し、互いに協力しながら社会を築いてきたはず。ところが誰が言い出したのか「個性が大切」「独創性こそ素晴らしい」という思想が暴走をはじめ、その結果が、まるで他人と同じであることが間違いで、他人と違う人間であることこそが正しいとさえ取れる昨今の風潮であるように思います。そもそも世の中がそうした独創的な人間だらけになったら、この社会は一体どうなってしまうのでしょうか。他人と違うことが当たり前なのだから、社会のルールなど全く意に介さず、それゆえ恥という概念も持たず、他人を理解し受け入れることが出来ない人間達の手によつて、この国の普遍的な価値観も、歴史も文化も壊滅してしまうかも知れません。今や教育の基本とも言えるこの思想は、私たち若者世代を中心に明らかに悪影響を及ぼし始めています。成人しても社会と交わろうとせず、身勝手な独白線を通き進み責任を果たそうとしない若者が急増し、他人どころか家族や友人の

ことすら受け入れられずに、些細な理由で人を殺めてしまつ事件すら日常茶飯事になっています。また、そこまでではないにしても、会社や組織に入ると、一方では突然社会人としてのルールやモラルで縛り付けられ、もう一方では「個性を発揮しろ」だの「独創的な意見を出せ」だの口やかましく言われるのです。要するに「社会の枠からはみ出ない程度の、社会に都合の良い個性を発揮しろ」という矛盾を迫られるのですから、私たち若者は混乱してしまつのです。

私も個性とは何なのでしょう。私が関わっている「こども狂言教室」の子供たちを見る限り、十五名それぞれが十分個性を舞わせてみても、同じ役を演じさせてみても、背格好や顔つき、声や仕草、性別や雰囲気など一人一人違うのだから、誰一人として同じ表現になる筈がありません。それを個性と言わずに何と言つのでしょうか。無責任に個性や独創性を強要するよりも、自分の家族が何を考えているのか、友人が何を思っているのか、他人の気持ちを理解し受け入れられるようになることの方が、よっぽど教育的で重要なことであると思います。そういう人間達が作り上げる社会でこそ、本当の意味での「個性」が活かされるのではないかと思つのです。

六年振りに再会した仲間達と、ひとしき

りそんな会話をした後、彼らはさらに話を続け、「私達は卒業以来、皆それぞれの場所です。それぞれの表現方法を模索し、今なお磨きを掛けようとしている。卒業して六年、自分を表現する方法もほぼ確立して一段落した今、さらに跳躍しようとする足元を確認すると、自分が今立っている場所がいまいち不安定で、上手く踏み込めない」と言うのです。要するに、自分を表現する方法は知っているのに、自分という人格を形成する土台の脆さに気付いて戸惑っているということなのでしょう。冒頭の「人格に裏打ちされた個性が足りない」というのは、人間の普遍的な精神や価値観を取り扱う、舞台芸術をはじめとするその他の表現の世界に於いてでさえ、自国の古典を身近に感じられないでいる、表現者としての彼らの心の嘆きなのかも知れません。私を大きく変えてくれたかつての仲間達と、今またこうして交流が持てるのは、きっと何かがお互いを呼び合っている事であると思います。近い将来、この出会いが新鮮な、愉しい何かを運んできてくれて、再び私を大きく変えてくれるような、そんな気がしています。



金久蒼汲（かねひさそうきゅう）
一九七八年広島県呉市生まれ。

本名・金久寛章。大阪芸術大学舞台芸術学科卒業。小田とは同期。同じく安東に師事して稽古に通い卒業後、「大和座狂言事務所」に所属して研修を積んでいる。演劇人としての肉体訓練の重要さを自覚して日々精進を怠らない律儀さを持っている。二 三年、イラン公演で処女海外旅行を果たす。四 四年インドネシア公演旅行に参加。

「声の響き」

原 斗轟

音というものは、ある物体が一定の振動を繰り返して何かに共鳴することで、響きとなって私達の耳に伝わってきます。楽器はこの振動を作り出す器の形を変え、さまざまに響きを作り出します。またこうした原理は楽器だけに見られることではなく、人間が発する声もこれと同じ仕組みで響きとなって伝わってくるのです。音を作り出すにはまず何かを振動させることが必要です。楽器で言えばリード、マウスピース、弦などですが、人間で言えば声帯という器官がそれにあたります。しかし、それらの振動はそれだけではとても小さな音で、音色も良くありません。リードやマウスピース、弦などから生まれた振動は、オーボエやトランペット等に見られる「管」、バイオリンやピアノ等に見られる「器」によって、また人間の声帯から生まれた振動は、鼻腔、口、胸、腹によって増幅されることで大きな響きになるのです。このように音を響かせる原理は人間も楽器も同じなのですが、楽器と違って人間の器官は非常に複雑で、身体中で響かせるためには意識して器官を制御せねばなりません。声楽やオペラなどの西洋の発声は特に頭部を響かせて、

頭の先から声を飛ばし、まるで天に向かつて声を響かせているようです。私たちの狂言の発声は、主に腹部を響かせて、声を押しさえてまるで地を這うようなイメージです。また、アナウンサーなどの原稿を読む職業では、事実だけを伝えるためにあえて頭部や胸部での響きを抑えて、言葉を明確に伝えることに集中します。このように人間が作り出す声の響きには文化や宗教、ジャンルや目的などによって様々な種類があり、それぞれに必要な声の響きに応じて的確に身体を使い分けているのです。

私は人間の声の響きと感情は密接に関係していると思っています。相手に感情や意思を伝えるためには言葉も大事ですが、「言葉だけでは気持ちには伝わらない」と言われるように、言葉の字面と実際に伝わる感情や意思は必ずしも一致しないように思っています。言葉は単に伝えたいことの内容だけを担い、その奥の感情や意思は声の響きが担っているのではないかと思うのです。私はこれまで演劇に関わる上で、セリフ術や型などの技術が観客にメッセージを真直ぐに伝えられる仕掛けだと考えてきました。声の響き自体は、その技術を生かすための単なる材料なので、感情や意思の伝達とは直接の関係はないとも考えていました。確かに技術は物事を表現する上で必要なことです。しかしそれだけでは本当に伝えたい

ことは伝わらないと気が付いたのです。どんなに良い技術や受け継がれてきた伝統があるとも、伝えたい感情や意思が声として響いていなければ、ただの言葉の羅列になります。セリフを飛ばそうと躍起になるあまり、口先だけで言葉を羅列し、伝えるべき感情や意思を見失い、その結果中身の無いもの、死んだセリフになってしまうのです。言葉を生かすも殺すも人間が作り出す、感情や意思を伴った声の響きなのです。

現代はコミュニケーションツールの宝庫と言えると思います。携帯電話や電子メール、チャットやブログなど、実際に相手と向き合って感情をあらわにして意思を伝達しなくても、電話越しの声や文字、記号や絵文字などでコミュニケーションが取れてしまいます。こうしたツールが未発達だった頃は、相手と向き合った時に確実に意思を伝えられるように、声の響きに上手く感情を乗せて相手に投げ掛けていたはずですが、またその声の響きを鋭敏に感じ取っていたはずで、昔とは違い簡単にコミュニケーションが取れてしまう現代は、結果として実際に相手と向き合った時になかなか自分を表現できず、また相手の意思も上手く汲み取れない人間を量産しているのではないのでしょうか。室町時代から続く狂言の声の響きは、まさしく日本人が本来持っている声の響きです。私の考える「古典を身体に

入れる」とは、本来私たち日本人が持っているべき、感情や意思を伴った声の響きを取り戻す事だと思えます。相手と向き合わなくても簡単に意思疎通が図れてしまう現代だからこそ、その意義に注目して、古典が人々の生活の一部として欠かせないものになっていけば良いと願います。



原斗轟（はら とうこう）
一九八一年 福岡県久留米市生まれ。
本名・原裕之。大阪芸術大学舞台芸術学科卒業。在学中に狂言と出会い多大な触発を受け、学外公演「狂言レビュー」において四回の狂言出演を果たす。

大和座狂言事務所関連 催しのお知らせ

三月

三日【土】午後三時 神戸酒心館ホール

『酒蔵狂言コンサート』

狂言と洋楽の出逢い

「調子のよい鍛冶屋」ヘンデル

「トウルベール・ファンタジー」門田展弥

狂言「萩大名」

能舞・オーボエ・能太鼓のための創作楽曲

「万葉の心を詠う」

お問い合わせ ○七八八四一・二二二

四日【日】 午後二時 入場無料

貝塚市立山手地区公民館ホール

初めての狂言「蟹山伏」「棒縛り」

講話と講習「雪山」を詠う

お問い合わせ ○七二四 四四五〇〇九〇

十日【土】午後一時 大阪能楽会館

『大阪観世会定期能』

お問い合わせ ○六六三三三・二七二六

十七日【土】午前十一時 京都観世会館

『京都観世蛸雪会』

お問い合わせ ○七五七七一・六一一四

二十四日【土】午後一時 神戸港(非公開)
『海上自衛隊練習艦隊文化講演会』『講話と狂言』
会場：練習艦「かしま」内ホール

四月

一日【日】午後二時 いかるがホール

斑鳩町制60周年記念事業

『桜祭能』金剛流の能と狂言

お問い合わせ ○七四五 七四六八〇〇

十八日【水】午後二時

『古典伝統芸能と出会うひととき』その四十六

新シリーズ『眞の古典力』

仮題 『閑吟集を歌う』

編集後記

大和座は二月のA&Hホール公演を皮切りに一年が始まります。A&Hホールの公演は年始めにテーマを決め、そのテーマに沿って年間6回の公演を行います。

『室町』ところを知る』『しぐさと型』、

『凜とした日本語』、『室町の民衆像』と

続いてきたA&Hホールの公演であります

が、今年のテーマは『眞の古典力』です。

大和座が提唱してきた古典の力とは、人それぞれその基盤となる力、「自分」というものを定義づける上で根底を支える力を指します。今年はこの「力」にスポットを当て、6回の公演を行っていきます。『眞の古典力』は大和座が一番伝えたいメッセージでもあります。大和座のメッセージがしっかりと伝わる舞台にしていきます。どうぞご期待ください。

秀

発行日 二〇〇七年 二月二十四日
編者 許 秀美
発行者 安東伸元

大和座狂言事務所

代表 安東伸元

〒五六五・〇八四一

吹田市千里山東二丁目三之三

TEL 06(6384)5016

FAX 06(6384)0870

http://homepage3.nifty.com/yamatoza
e-mail: BYX04535@nifty.ne.jp

